

新たな始まり

Vol.38

親鸞聖人750回大遠忌

宗門長期振興計画の現状

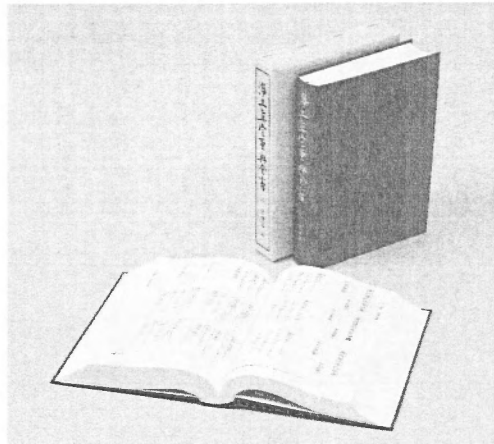
『浄土真宗聖典全書(宗祖篇上)』の魅力について

宗門長期振興計画の重点項目⑤「時代に即応する教学の振興」のうち、教学伝道研究センターでは、このたびの親鸞聖人七百五十回大遠忌を記念して、『浄土真宗聖典全書(宗祖篇上)』(以下「聖典全書(宗祖篇上)」)が刊行されました。すでにお持ちの方もおられると思います。これまでも「宗報」の誌面で、何度かこの「聖典全書」について紹介してまいりましたが、今回は改めてこの「聖典全書(宗祖篇上)」の魅力や活用法について紹介したいと思います。

1 親鸞聖人の真筆を網羅

今回の「宗祖篇上」は、「宗祖篇下」と合わせて、現在学界で認知されている親鸞聖人の真筆をすべて収録しています。特に「宗祖篇上」で申しますと、『顕浄土真実教行証文類』は、真宗大谷派蔵親鸞聖人真筆本(いわゆる坂東本)が底本となっています。また二段組で翻刻した「尊号真像銘文」は、上下段

ともに高田派専修寺蔵の親鸞聖人真筆本が底本となっており、親鸞聖人がたびたび書写して門弟に与えられた聖覚法印の「唯信鈔」は、底本だけではなく対校本にも親鸞聖人の真筆本を用いています。近年発見されたものとしては、平成四(一九九二)年に本派本願寺宝物庫より発見された「道緯禪師略伝」、あるいは平成十四(二〇〇二)年に大阪府八尾市で発見された経文の抜粋や、昨年末に大谷大学で初公開された願文の抜粋など



『浄土真宗聖典全書 (宗祖篇上)』

もすべて収録されています。少し変わったところでは、親鸞聖人が本尊として用いられた名号や「鏡御影」などの親鸞聖人影像の、上下段に書かれている経論の讚銘もすべて収録していますし、親鸞聖人ご自身の手控え、あるいは門弟へ書き与えられたと考えられる断簡などもすべて収録しています。さらに「三帖和讃」については、この誌面でも何度かお伝えした通り、三段組で翻刻していません。特に中段と下段に翻刻した高田派専修寺蔵の、いわゆる国宝本と顕智上人

本については極めて多くの左仮名(左訓)が施されており、それらが系統ごとにごう書かれているのか、違いがひと目でわかるようになっていきます。

これだけ親鸞聖人の真筆本をはじめとした善本を収録した聖典や史資料集は、今回の『聖典全書』が初めてのものになります。

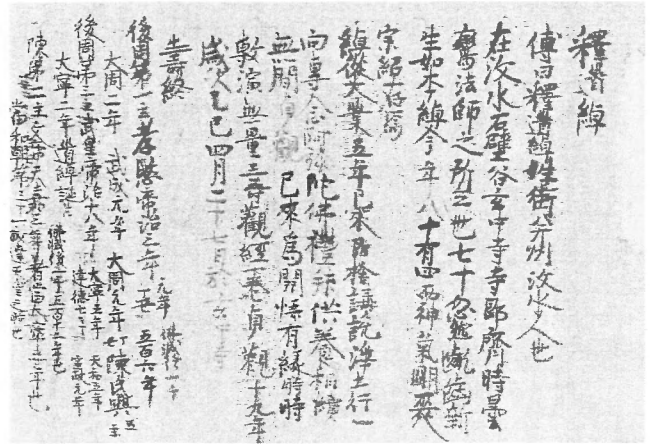
2 他の収録

「宗祖篇上」には、親鸞聖人の書かれたものだけではなく、親鸞聖人の言行を伝えた「恵信尼消息」や「歎異抄」なども併せて収録しています。たとえば「恵信尼消息」には、親鸞聖人のそばに長くおられた恵信尼公ならではの貴重な内容が多く含まれており、親鸞聖人の比叡山時代や源空(法然)聖人との出会いにいたるまでの経緯など、他の史資料では知ることのできなかつた事柄を伝えています。また「歎異抄」も、親鸞聖人の法語を伝えたものとしてきわめて広く知

られており、やはり他では知ることのできない親鸞聖人のすがたを多く伝えていきます。他にも親鸞聖人が門弟への消息の中で、何度も熟読するように勧められている「唯信鈔」「自力他力事」「一念多念分別事」「後世物語聞書」も収録しています。

3 付録の活用

本年の新年号でもお伝えしましたが、「宗祖篇上」には、さまざまな付録があります。今一度記しておきますと、①底本・対校本一覽、②『顕浄土真実教行証文類』返点校異、③『親鸞聖人御消息』配列各本対照表、④『顕浄土真実教行証文類』科段、⑤年表、⑥系図の六項目です。これらのうち、今回は④⑤⑥について紹介しますと、まず④の『顕浄土真実教行証文類』科段では、親鸞聖人畢生の大著である『顕浄土真実教行証文類』の科段を、「本典研鑽集記」(是山和上研鑽指導宗学院同人集記)に基づいて示してい



親鸞聖人真筆「道綽禪師略伝」(本願寺蔵)

ます。科段表を開いていただきますと、そこに付されている連絡頁、および本文の冒頭の四文字を確認すれば、どの文章が起点となつてどういう釈や引文が展開しているのかがわかります。また本聖典には、『浄土真宗聖典(註釈版)』(第二版)に準じた柱書はしらがきが付されていますが、柱書とは、あくまでその大枠を示したものです。今回の科段表では、例え

ば柱書には「引文」としか示されていない箇所、誰の著作が、何文引かれているか、というところまで示しています。

次に、⑤の年表では、親鸞聖人が著作を執筆された時期と共に、身の周りに起きたさまざまな出来事も含めて記しています。たとえば『恵信尼消息』には、親鸞聖人が帰洛きらくされてから火事にあわれたことが記されている箇所があります。こうした時に年表を開いていただきます

と、その火事とは、親鸞聖人が八十三歳の時の、建長七(一二五五)年十二月十日のことであることがわかります。また、夢中での和讃の感得や、息男である慈信じしん房ぼう(善鸞)の義絶等についても、その時期を年表から確認できます。このように、親鸞聖人が、いつ、どういう状況で、何を述作されたのかについて確認しながら拝読していきますと、より一層、親鸞聖人のお心を感じることができるようになります。

また、⑥の系図では、親鸞聖人の縁故者についてまとめられています。先掲の

『恵信尼消息』には、親鸞聖人と親子の縁にある「ますかた」が、親鸞聖人の示寂じこくの場に立ち会われたとの記述があります。そこで、系図を見ていただきますと、親鸞聖人の第五子に「益方」という名が記されていることが確認でき、親鸞聖人との関係がより深く理解できます。このように、お聖教しょうきょうを拝読するにあたって、非常に有益な付録が揃っています。ぜひ活用していただければと思います。

4 こらからの刊行予定

今回、刊行されました「宗祖篇上」は、『聖典全書』全体では第二巻にあたります。そこで『聖典全書』全六巻の刊行予定を以下に記しておきたいと思えます。

第二巻「宗祖篇上」二〇一一(平成二十三年)三月刊行

第一巻「三経七祖篇」二〇一二(平成二十四)年度刊行予定

成二十四)年度刊行予定

第五巻「相伝篇下」二〇一三(平成

二十五)年度刊行予定

第四卷「相伝篇上」二〇一五（平成

二十七年）年度刊行予定

第三卷「宗祖篇下」二〇一六（平成

二十八年）年度刊行予定

第六卷「補遺篇」二〇一八（平成三

十）年度刊行予定

巻号順での刊行ではないので少し驚かれるかもしれませんが、さまざまな検討を経てこのような順になりました。次は来年度に「三経七祖篇」が刊行予定であり、その次の「相伝篇下」には蓮如上人に関するもの、その次の「相伝篇上」には覚如上人・存覚上人に関するもの、その次の「宗祖篇下」には、親鸞聖人によって書写された源空聖人の法語集「西方指南鈔」や曇鸞大師の「往生論註」および善導大師の五部九巻の加点本など、最後の「補遺篇」には本願寺関係の史資料などになります。

5 最後に

今回、本聖典のキャッチコピーとして「聖典の最高峰」と銘打ちましたが、以上述べてきた本聖典の特徴や工夫によって、その名に恥じないものとなっていると自負しています。しかしながら聖典を編纂するということは、刊行をもつて終了するというものではありません。本聖典がより多くの方々に拝読されることによって、ひろく皆様のご批判、ご助言を

いただきながら、より完全なものにしていくのが聖典編纂のつとめであると考えています。本聖典を通して一人でも多くの方が宗祖のお言葉の一つ一つに触れていただければと思います。

なお、最後になりましたが、本聖典を編纂するに当たって、親鸞聖人の真筆をはじめ諸聖教の善本を網羅するには、それらを所蔵する寺院や個人、および関係学校の多大なる協力が不可欠でありました。ここに甚深の謝意を表します。

（教学伝道研究センター）

親鸞聖人750回大遠忌 宗門長期振興計画

【基本的な考え方（コンセプト）】

- 『新たな始まり』
～明日の宗門の基盤作り～

【目標】

- 親鸞聖人750回大遠忌法要の修行
- 現代社会に応える教学・伝道態勢の構築とみ教えに生きる「人」の育成

【重点項目】

- ①法要の修行
- ②記念行事等の推進
- ③協賛行事
- ④伝道態勢の整備
- ⑤時代に即応する教学の振興
- ⑥新たな門徒の誕生（教線の拡充）
- ⑦国際伝道の推進
- ⑧寺院の活性化対策
- ⑨過疎・過密対策
- ⑩地域社会との交流
- ⑪現代社会への貢献
- ⑫人材育成の新規対策
- ⑬既存の人材育成施策の強化
- ⑭宗務機能の点検と拡充
- ⑮境内地等の整備